匈奴と同種族であつたと思はるゝ東胡の一種鮮卑族については、托跋魏に之があつたことが見えて居る、即ち太祖の登國三年に天神四十所を建て、その祭祀のことは女巫をして行はしめたとあり、また天賜二年に天を祀つた時にも、女巫が皷を執つて之に携はつたと記されてある。[3] 同じく東胡の苗裔といはるゝ蠕々にも女巫があつて、可汗醜奴は深く之を信じ、遂にその爲に籠絡せられながら覺ることが出來なかつたことも見えて居る。[4] 契丹にも同樣に女巫があつて、人の膽を取つて延年藥を調合したことがあり、[5] また國初時代の儀式にはそれ〴〵男女の巫[6]が事を執り行ひ、戰爭の可否をトひ定めることなどもあつた。蒙古についても後に述べるが如く、巫の記事は東西の史乘に屢々見えて居るが、それが今日迄引き續き彼等の間に存在して居るのである。

次にトルコ族の巫に關する記載を求めると、北史高車傳に見ゆる女巫の記事などが古いものであらうと思ふ。即ち此の部族は地震が起るとその住地を棄てゝ他所に移り去り、來歲秋に馬が肥える頃になると、また相率ゐて其の地に來るのが習慣であつたが、その際には拔刀の女巫祝が祓ひをするといふのである。ついでは突厥も巫覡を信じ、[7] 黠戛斯（キルギス）にも回鶻にもまた之があつたことが記されて居る。[8] 就中西突厥の巫については、西紀五六八年に東羅馬のヂャスチン二世の命を受けて西突厥に使したゼマルコスが、これを實見した記事も存して居る。[9]

ツングース族でも、女眞に巫のあつたことは金史にも見えてあるが、大金國志にも「疾病には醫藥無し、巫祝を尚び、病む者ある時は猪狗を殺して以て之を攘ふ」と記してある。[10] その後ツングース族として大勢力を現はした滿洲族の間に巫が存したことについては、こゝに記述するの必要はあるまい。

以上記した所は勿論昔の北方民族の巫に關する漢史の記載の一小部分であつて、精細に拾ひ集むれば、なほ他の